

「アーティスト村（HIRAKU）」新たな芸術家を決定

市長

アーティスト村（HIRAKU）に4人目のアーティストを迎え入れることとなりました。

現在、HIRAKU では陶芸家の薬王寺太一さん、染め物作家の山本愛子さん、漫画家であり小説家でもある折原みとさんが活動されています。

この3名のアーティストに加え、今年度、新たに、谷戸コミュニティの活性化に協力していただける芸術家の方を募集いたしました。

4人の方からご応募いただき、審査の結果、今日、ここにいらっしゃる水戸部春菜さんに決定いたしましたのでご紹介をさせていただきます。平面作家の水戸部春菜さんです。

平面作家 水戸部 春菜 氏

ご紹介いただきました、水戸部春菜です。本日は、よろしくお願ひいたします。

今回、アーティスト村（HIRAKU）に迎えていただきまして、とてもうれしく思っております。私は普段、絵画の制作を主な活動としています。活動の場としてはギャラリーや美術館での展覧会、地域に滞在しながら制作を行うレジデンス、コミュニケーションをとりながら創作活動を行うワークショップなどをしております。HIRAKU は知人から聞いて知り、実際に訪れ、とても魅力的な場所だなどと思いました。私のできることを通し、交流を深め、コミュニティの活性化につなげていけたらと思っております。よろしくお願ひいたします。

記者

水戸部さんにお尋ねします。神奈川県出身とのことですが、自治体名をお伺いできますか。

平面作家 水戸部 春菜 氏

座間市の出身です。

記者

横須賀市にはこれまで何か縁はありましたでしょうか。

平面作家 水戸部 春菜 氏

今までは、特に縁はありませんでした。

記者

三浦半島に來られたことはありますか。

平面作家 水戸部 春菜 氏

あまり機会がなく、この度、初めて伺いました。

記者

分かりました。高校は北海道とのことですが、転勤か何かですか。

平面作家 水戸部 春菜 氏

美術の学校がありまして1人で北海道に行きました。

記者

なるほど、早い段階から美術の道に志を持たれていたのですね。

平面作家 水戸部 春菜 氏

はい。

記者

滞在制作、先ほどレジデンスとおっしゃっていましたが、どのような活動をされていたのですか。

平面作家 水戸部 春菜 氏

静岡県掛川市にある場所で古民家や使われてない家を利活用するプロジェクトがありました。そこでは、掃除から始めて自分の住む場所をつくりながら制作活動を行い、その場所を盛り上げるということをしていました。

記者

HIRAKU へ初めて訪れた時の印象を教えてください。

平面作家 水戸部 春菜 氏

自然が豊かで空気も澄んでおり、インスピレーションがすごい湧く気がして、ここで活動できたらなという思いが募りました。

記者

分かりました。ご活躍を期待しています。

平面作家 水戸部 春菜 氏

ありがとうございます。

記者

静岡県の古民家活用プロジェクトなどをなさってきたということですが、コミュニケーションをとりながらワークショップをされてきたというお話もありました。具体的にはどのようなコミュニケーションをとってワークショップをされてきたのですか。

平面作家 水戸部 春菜 氏

静岡では3年間滞在をしながら制作をしていました。

最初の1年目は、その地域にいる100人の方と話しながら、その方の絵を描く。その私が描いた線を地域の方々に色を塗っていただくということを行いました。

2年目、3年目も地域の方々と、そのようなコミュニケーションをとりながら活動をしていました。

記者

分かりました。今、拝見するだけでも作品は黒い線で描かれた作品が多いと思うのですが、使ってらっしゃる画材は筆とかペンとかでしょうか。

平面作家 水戸部 春菜 氏

普段はアクリル絵の具や墨、普通の鉛筆などいろいろな画材を使うようにしています。

記者

人物を描いているものが多いのでしょうか。

平面作家 水戸部 春菜 氏

はい。普段は人物画が多いのですが、建物や最近では動物なども描いています。

記者

ワークショップの時も、黒い線で人の絵を描き、それに色を付けてもらうというようなワークショップだったという理解でよろしいでしょうか。

平面作家 水戸部 春菜 氏

はい。地域の方々と関わりながら楽しめるようなことがしたいと思い、そのようにしました。

記者

横須賀でこれから活動されるわけですが、横須賀で考えていらっしゃるコミュニケーションとかワークショップはありますか。

平面作家 水戸部 春菜 氏

そうですね、五感や体全体を使ったワークショップや、自然がとても豊かなので、そのような環境の中で生かせる企画など、皆さんが楽しめるものを作っていかれたらと思っています。

記者

ありがとうございました。

記者

水戸部さんにお伺いします。

すでに3人の方がお住まいになられていると思います。いろいろな分野の方々だと思いますが、何か連携して一緒にやりたいものなどのイメージや展望みたいなものがあればお聞かせください。

平面作家 水戸部 春菜 氏

陶芸の作家さんと染織の作家さんの2人にお会いしたのですが、皆さん、私にはない技術や表現力を持っている方々なので、その中で新しい表現ができたらなと思います。また、そのグループで、お祭りのように人を呼び込めるようなことができたらいなと考えています。

記者

ありがとうございます。

記者

現在、松戸市にアトリエとお住まいを構えているとのことですが、今回、HIRAKUの方に入られるわけですが、お住まいはどうされるのですか。

平面作家 水戸部 春菜 氏

HIRAKUの方に居住します。

記者

完全に今のお住まいを引き払ってここへ来られるということでしょうか。

平面作家 水戸部 春菜 氏

はい。

記者

横須賀市に伺います。入居は2月からですが、居住は何年間というものが決まっていれば教えてください。また、4人からの応募がある中で水戸部さんを選んだ理由をお願いします。

まちなみ景観課長

居住年数について、現時点では特に定めておりません。

また、水戸部さんを選出した理由としまして、審査員の中に美術にたけた方もいらっしゃるのですが、その方の意見を聞くと、水戸部さんの将来性を感じるということをおっしゃっていました。また、他の審査員の方はコミュニティを活性化するような意欲的な働きが期待できること、そのような点が水戸部さんを選んだ理由でございます。

記者

今のお話を聞いて水戸部さん、感想をあらためて教えていただけますか。

平面作家 水戸部 春菜 氏

自分ではまだ微力だと思っている部分もあるのですが、横須賀市をはじめ田浦地区などをもっと、今よりも盛り上げられるような企画をどんどんしていきたいと思っているので、期待に応えられるよう頑張りたいと思います。

記者

ありがとうございます。

記者

市長にお伺いします。このアーティスト活動について、今後の期待などあれば教えてください。

市長

アーティストの皆さんに来ていただいて横須賀を盛り上げていく、どんなまちにあってもどの地域にあってもアートの必要性があって、コミュニティの中心にそこがあれば皆さんの憩いの場になり豊かな生活ができるということを横須賀から発信をしていければと思っています。

まさに水戸部さんはその代表になるのではないかと非常に期待をしているところです。

記者

アーティスト村は、まだまだ住まいの拠点としては部屋があるかと思うのですが、上地市長のイメージではどれくらいの規模を最終形としてお考えになっていますか。

市長

ここだけではなく、横須賀にもっと点在をさせていきたいと考えています。

山があり自然があり海があり、アート、芸術、音楽がちりばめられているまちというのが、観光都市として発展していく上で非常に重要だと考えているので、これだけでは終わらないと思っ

ています。

記者

ありがとうございます。

(フォトセッション)

<その他案件>

記者

子育て世帯への臨時特別給付金の支給について、昨日、先行の5万円の支給があったようですが、残り5万円の支給方法について、方針は決まりましたでしょうか。

市長

悩んでいます。基本的にはクーポンにしたいと思っています。

本来の筋、それは経済対策も含めてなので、少なくとも私は、残りの5万円はできる限りクーポンで皆さんにお配りするのが横須賀市の経済対策につながるため、そうしたいと思っています。

ただ、時期の問題、それからクーポンがあまねく事業者の皆さんに使われるのかということも考え合わせてどうなのかということ、今、検討している最中です。

もし、広く渡らないのであるならば、現金にするという方法もありますが、基本的にはクーポンにしたいと思っています。

記者

クーポンがあまねく使われないとはどういうことでしょうか。

市長

要するに、横須賀市の経済対策として底上げにつながらないのであるならば、それはクーポンではなく、現金にした方が良いのではないかという考え方もあるので、その辺りを検討している最中です。

記者

経済対策につながるのかというその見通しを立てる判断は、どういう基準とするのでしょうか。

市長

例えば半分の企業の協力が無いのであるならば、これは現金にするしかないと思います。

どういう方法で全体に配ることができるのか、ということを検討している最中です。

そのようにご理解いただければと思います。

記者

そうすると経済対策を重視した考え方ということでしょうか。

市長

いや、両方です。

ご承知のとおり、横須賀市は60パーセントの人たちが横須賀で職を得ているので、市内でお金を使っていたきたいと考えています。

調査をすると、市外で使われる方が多いので、横須賀市内で使っていただくような方法がないのかと。例えば、現金にした場合、横須賀で使うように強制することはできないので、基本的には子育て世代に対する支援でありながら、同時に経済対策ということを満足させる方法を考えると、クーポンなのではないかと考えています。現在、クーポン券ができるだけ多くの事業者の皆さんにお使いいただけることが可能なのかということを検討している最中であるとご理解をいただければと思います。

記者

決定はいつ頃までにしますか。

市長

できる限り早くします。

記者

昨日、先行して振り込みが行われました。県内で1番早かったということですが、スピード感をもってできた要因などがありましたらお聞かせください。

市長

職員の働きだと思っています。

コロナを通じて、市民のために何ができるかということを常に考えている職員が積極的に自分でチームを組んで仕事をしてくれたので、こういうことができたのだと思っています。

同じようにクーポンに関しても、できる限りどこよりも効果があるようにということを職員は考えてくれている最中です。

記者

一方で、現金一括を希望する自治体も多くあります。

クーポンであると事務的経費がかかるなどのデメリットを訴えている自治体も多いと思いますが、その点についてはどのようにお考えでしょうか。

市長

その費用は、国に出していただけるということと、全体から考えれば、国のその費用も経済対策にはなるのではないかと思います。

私は横須賀市民の子育て対策と経済がどうしたら潤うのか、その1点だけに絞り、できるだけ早く大きな効果を生むようなものは何かということを考えるということだけです。

記者

私が聞いた範囲ですけれども、いわゆる受給世帯からはできることなら現金の方がいいということをよく聞く話です。ただ、先行して5万円をいただいたことはすごく助かるしありがたいということですが、その辺の配慮というのはどうされるのでしょうか。

市長

そういうお声も聞いており、理解をしているつもりです。

ただ、もう少しお待ちいただいて横須賀市民のために何が1番いいのか、最善の検討をさせていただきたいと思っています。皆さんのお気持ちが現金10万円一括払いの方がうれしいということも私はよく分かっているつもりです。

記者

不勉強で申し訳ないのですが、クーポンは確か子どもの教育に関わることにしか使えないというような話だったかと思うのですが。

市長

10万円を現金で出すと国が判断した時点で、その話は終わりであると私は考えています。

記者

そうなのですか。

市長

クーポンだけは子どもにのみということは、理論上おかしな話になりますよね。

記者

それはそのルールとして、特にクーポンは何に使っても良いですということが、国から示されているのでしょうか。

市長

クーポンは、これだけに限定しますということは受けていません。

記者

なるほど。横須賀市としては、そのクーポンの半分は市の経済対策として使うことが良いのではないかということを検討しているということですか。

市長

はい、おっしゃる通りです。

記者

その場合、例えば、プレミアムをつけるとかそういうこともお考えですか。

市長

それは考えていません。

プレミアム商品券とはまた別の問題ですから、プレミアムを付けるつもりはありません。これは国の施策なので。

その中で、市内活性化のために、何が最善なのかなど、さまざまなことを検討している最中です。おっしゃるとおり、10万円現金ですぐ支給されるというのは子育て支援の方において、多分それがベストだと思います。ただ、それが市内経済の活性化になるのかと考えるならば、もう少し考える必要があるのではないかとということでクーポンにしたいなと基本的には考えています。

記者

クーポンにした場合は、教育に限定せず、市内で使えるようなクーポンにするということでしょうか。

市長

はい。それがどこまで広い範囲で使えるかということにより、変わるものであり、それによる判断が必要であると考えています。

例えば、市内の半分ぐらいの商店にしか使えないのであるならば、この趣旨に反すると思うのです。そうなれば、現金にする必要があるのではないかとという考え方もある。そういう意味で今検討している最中です。

記者

それでは、商工会議所などにヒアリングをしているところなのではないでしょうか。

市長

いや、これから始めるところです。

記者

そうなると、年内の決定は難しいということでしょうか。

市長

いや、年内にします。

記者

なるほど。

先ほど経費がかかるという話でしたが、手間もかかるという話も自治体から声が上がっているというのを聞いています。また、これからワクチンも始まる中で職員の負担という意味でもクーポンは大変であると思いますがそこはどう考えていますか。

市長

大変ではあると思いますが、うちの職員であれば可能であると思っています。

記者

経済対策として市内の事業者に対するお買い物、用途を限定することで市内の消費に結びつける。それにより、市内の経済が底上げされるということは一つ効果がある。クーポンを出すということは、クーポンならではの政策を行う必要があるわけですから、そのための業務委託経費、それが当然、市内事業者になると思いますが、そこにもお金が下りて経済が底上げする。こういう理解でよろしいですか。

市長

はい。ただ、スピード感が必要なので、基本的には市内、例えば印刷も含めて考えているのですが、そのスピード感を満たせないのであれば、この印刷資金は市外になるかもしれません。

やはりスピード感、あわせて効果を考えなくてはならない。最大限の効果を上げるにはどうすれば良いのか、それも含めて検討している最中です。

記者

クーポンを押し出す場合、1番大きなインセンティブというのは市内の消費につなげるということですね。

市長

おっしゃるとおりです。

記者

分かりました。あとはどれだけの事業者がそのクーポンのお買い物を受け付けてくれるかということですね。

市長

そういうことです。

記者

それを可及的速やかにヒアリングを行い、年内の交付を考えているとのことですね。

市長

おっしゃるとおりです。

(終了)